アラシのごとく！

猫耳執事

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラシのごとく！

【Ｎコード】

Ｎ１２７６ＢＡ

【作者名】

猫耳執事

【あらすじ】

サンタさん（ＣＶ，若●）の部下のミスによって死んでしまった主人公のお話

これからハヤテのごとく！の世界で頑張って生きます！！

プロローグ（前書き）

駄文です。
この小説の今後は読者の皆様しだいです。
ヒロインはヒナちゃんがいいな？
作者の更新速度は感想＋お気に入り＋評価で決まります。

プロローグ

・・・・・・・みんな聞いてくれ、今俺の目前に変なおっさんがいるんだ。

上から下まで赤と白のめでたそうな衣装を纏って真っ白なお髭を蓄えたおっさんがいるんだ・・・・・・見るからにサンタの格好をしたおっさんがな！！！！

しかも

「お～まえは死んだのだよぉ～若者よ～～」

すごく聞き覚えがある声をしてるんだ！！ド●ゴン●ールのセ●や某魚介類だらけの国民的アニメのア●ゴさんの声なんだっ！！

「い～～かげんにこちら話を聞きたまえぇ～～」

「なんですか？わかもｔ・・・・・・ところであなたは誰ですか？」

「君に素ぅ晴らしいプレゼントを贈りにきたサ～ンタさんだよぉ～～（キランッ）」

「・・・・・とりあえず、クリスマスは過ぎてますよ？」

「そ～んなことはわ～かってるよぉ～。君は馬ぁ鹿なのかねぇ～～？」

「（イラッ）なら何しに来たんですか？もう新年なのでサンタなんか呼んじゃいませんよ？と言うかここ何処だよ？今すぐ家に帰せ馬鹿野郎！」

「いや～、ちょ～ッとしたミスでねぇ～、君の家に部下のソリが突っ込んでしまったのだよハ～ハッハッハッハ。そのソリが君に直撃してしまってねぇ、君は新年早々死んでしまったわ～けなのだよ～～。その部下は今頃北極圏のどこかでトナカイに引き～ずりまわされているだろう～～ぶるるあああああっ！！」

「はぁ？！何言ってんのおｍ「そ～んな訳で～、神や魔王とよく酒を飲んだりしてい～るぅ、こ～ころやさしいサ～ンタさんがぁ、き～みに新しい人生をプ～レゼントしちゃうぜぇ、ハイ拍手ぅ！！」

「てめぇ何わけのわかｒ「ハイ拍手ぅ！！」おｍ「ハイ拍手ぅ！！」だかｒ「ハイ拍手ぅ！！」・・・（パチパチパチ）・・・・死んだのは分かったけど新しい人生ってどういうことだ？！」

「か～みちゃんとま～おちゃんにた～のんでみたけどよぅ、『流石に生き帰せれねえわ～～（笑）』って話だから我慢してくれぃ。後戻りはできねぇ、生前の記憶は適当に消しておくから覚悟しとけぇ。お詫びといっちゃぁなんだが適当に特典盛り込んでおいてや～るから、じゃぁな若者よ～～、もういっぺん死んだときにま～た会おう！！」

シャンシャンシャンシャンシャン

「ちょ、お前らなんだよっ！！俺をソリに縛り付けんな！！はぁ？もう出発？グッドラック？てめぇらふざけてんのか？！安全は保障できないってどうゆうことだよ！！『カウントダウン５・４・３』お前ら覚えとけよ？！いつかぶん殴ｒ『２・１・０トナカイ型時空突破新世代ソリ試作機〈タイタニック〉発射します』その名前はありえねぇぇぇぇ・・・・・・・・・・・」

「こ～して少年は旅立ったのであったぁ。さらば少年よぉ、い～つかまた会おう。」

プロローグ（後書き）

感想待ってます＋あなたの一番好きなキャラクターに対する一言も待ってます

そういえば原作で自分の好きなアニメ（ゲームだったっけ？）のキャラが違う二人（駄目主人と書記）が言い争うってシーンあったっけ・・・・・・

第一話　紅いサンタクロース（前書き）

本当のサンタは黒色の衣装を着ていたそうです。

今の赤白サンタは、コカ●ーラのイメージキャラクターとして採用された際の物が世界に広まって標準化してしまったそうです。

第一話　紅いサンタクロース

～十六年前～

ここは安いと評判の産婦人科の一室。
つい先程ここで、また新しい命がふたつ生まれた。
その子たちの親は早速自分の子供たちに名前をつけるようだ・・・

父「ハヤテだ、この子の名前はハヤテ。ハヤテと名づけよう」

母「まあいい名前。でも、どうしてなの？」

父「そんなの決まってるじゃないか母さん。借金取りから疾風(はやて)のように逃げられる強い子に育ってほしいからだよ」

「・・・・・」　（赤ちゃんハヤテ、あきれて泣き止む）

母「ならもう一人のこの子はどうするの？」

父「それももう決めてあるさ。ハヤテの双子の弟に当たるこの子の名前はアラシ、綾崎アラシさ」

母「ハヤテと同じでいい名前ね。で、どうしてなの？」

父「簡単だよ母さん。借金取りを嵐(あらし)のように叩きのめしてくれるような力強い子に育って欲しいからさ」

「・・・・・・」　（心の中で「暴力で解決しようとすんなよ！」とツッコム赤ちゃんアラシ）

母「へえ、それはすてきな名前ねえ」

父「だろー、僕天才なんだ。これでいつ子ども達を置き去りにして逃げることになっても安心だよ」

母「さすが父さんね」

父＆母「ははははは♪」

こうしてハヤテ、アラシと名づけられた少年達は、生まれた日から完全無欠の能力を身に着けるべく、宿命づけられたのであったぁ。
（ＣＶ，若●）

hayateSIDE

その昔、夢に出てきたサンタに聞いた。

「ねえサンタさん・・・・・・どうして僕達にプレゼントを持ってきてくれないの？」

『それはね、お前達の家がビンボーだからだよ。』

「！！（ガーン）」

サンタは噂以上に正直な奴だった。

「ええ!?で・・・でもそれじゃ僕達はどうしたらいいのさ!?アラシにゲーム買ってあげるって言っちゃったのに!!」

『働け少年!!「働かざる物喰うべからず」欲しい物は自分でどうにかしろ。だが信じろ・・・・・最後に笑うのはきっと・・・・・・ひたむきでマジメな奴だから・・・・・それでもお前達にはプレゼントはやらないけどｎ《てめぇーーー!!まちやがれぇーーー!!》・・・・厄介な奴が来よったのぅ』

《ハヤテ!!こんな奴のいうことなんて聞かなくていい!!こいつは今すぐ俺が殺る!!死ね!このクソサンタ!!積年の恨みここで晴らしてやる!!》

『ちょ、おま、去年よりもパワーアップしてね!?というか自分の兄の夢に乱入ってどんだけだよ?!』

《黙れ!!お前が実行犯だって事を知った後から俺は毎日鍛錬を欠かさなかったんだよ!!某公式チートさんも言ってたろうが!「気合で何とかなる」って!!》

「（ポカーーン）」

僕はこの後、自分の双子の弟がサンタを血まみれになるまでボッコ

ボコにする様子をただただ見ていることしかできなかった。

《ふぅ、これでいろいろスッキリしたぜ！！》

弟のものすごくいい笑顔がとても印象的だった。

第二話　僕らとヤッサンのランデブー（前書き）

お気に入りはまだ三件だと・・・・・・

とりあえず三名の皆様ありがとうゴザイマス

総アクセス数が２００を満たないこの現実・・・・・ｏｒｚガクッ

第二話　僕らとヤッサンのランデブー

ａｒａｓｉＳＩＤＥ

生まれたときから前世の知識を完全に覚えていた僕は、幼児ゆえの羞恥プレイを乗り切り、幼い頃から夢に出てきた仇（サンタ）をぶん殴り（とてもつらい修行をしたことは言うまでもない）、自分の親の破綻振りを思い知らされながら生きてきた。

今になってはサンタからもらった特典とやらにとても感謝している。

新しい生を受けてから早１６年・・・・

今僕はとても焦っていた

「迂闊だった！！都内から出れば流石にばれないだろうと思ってたのに！！」

県外の有名な万屋（よろずや）《決して万屋銀●んなんて名前じゃないからなっ！！》にアルバイトとして勤めていた僕は自分の考えの甘さを後悔していた

「これじゃ年が越せないよ！！まさか職場に押しかけて子供の給料騙し取っていくなんて！！」

せっかく家から車で四時間はかかるような遠い職場を探したって言うのに、それを見つけ出して「急に祖母の入院がしてしまって・・・・アラシにはもう言ってありますからどうか今月分の給料前借させてくれませんか？」なんて言って数十万全額持っていくなんて・・・・

しかも年齢を偽って働いていたことまでばらして行ったせいで社員さんからは「流石に高校生をこのまま働かせるわけには行かないから・・・・ちゃんと卒業したらぜひこの会社に来てね！！」って言われて・・・・・・・気持ちは嬉しいですけど今お金がいるんですよ！！

『もし両親が借金してた場合、返済に充てるための貯金』を下ろすしかないか・・・・

「とりあえず、ハヤテと相談しないと。ハヤテ、帰ってきてる？（ガラッ）」

「アホーーーーーーーーーー！！」

「いきなりどうした！！・・・・とりあえずその手に持っているものっすっごい桁の借用書から今の状況は理解したわ。とにかく逃げるぞ！！」

『ゴラァ綾崎ぃ！！息子達もらいに来たぞーーーー！！出て来いやゴラァ！！』

「ほら来たぞ！こっちだ！！早く！！」

「わ、わかった！！」

ｈａｙａｔｅＳＩＤＥ

「とりあえず差し押さえの手が回る前に銀行から現金下ろしてくるから公園で待ってて！！」

そう言ってアラシはどこかに行ってしまった・・・・いつの間に

貯金してたんだ？

それはさて置き・・・・あのタイプのヤクザは一億五千万なんて金額の借金を絶対見逃すわけがない！！

※綾崎家の双子は両方とも長年の経験からどのタイプのヤクザかを一目で見分けられるというできれば一生目覚めて欲しくない能力を持っていた！！

幾らアラシでも一億五千万なんて金額を貯金してるはずがないし、そんなはした金持って行っても臓器を売られてしまうのは確実！！

僕らみたいな人間が・・・・てっとり早く一億五千万作るには・・・・それこそ強盗か身代金目的の誘拐くらい・・・・・

こうして少年は勝手に一人で思考を突っ走らせて悪の道へ進もうとしていったのであったぁ（ＣＶ，●本）

第三話　ロリコンに育てたつもりはありませんっ！！（前書き）

少し評価が増えて嬉しいです！！

ネロの命日→１２／２４

第三話　ロリコンに育てたつもりはありませんっ！！

ａｒａｓｉＳＩＤＥ

無事に通帳から全額下ろすことができた僕は、ハヤテとの待ち合わせ場所である負け犬公園（嘘じゃないよ！！）に急ぎました。

すると

「人の獲物に手を出すなぁ！！ネロの命日にナンパなんて！！お前らどこのパトラッシュだ！！帰る家がある人はとっとと家に帰れ！！」

大声で意味のわからないことをほざいている兄がいました・・・・・・・

まぁ、小さい少女をかばっての行動だったみたいで、あっコートを貸してあげるなんて親切ですね？身内としては優しい子に育ってく

れて嬉しいかぎりです。

ですが

「僕と・・・・・付き合ってくれないか？」

「へ？」

ロリコンに育てた覚えはありませんっ！！

「僕は・・・・・（人質として）君が欲しいんだ。」

今までそんな様子はなかったのに・・・・・兄をこの手で始末しないといけなくなるなんて・・・・

「命がけさ・・・・一目見た瞬間から・・・・君を・・・君を（人質として）さらうと決めていた」

「はい、ちょ～～～～とこっちに来ようか？ハヤテ君？（ギリギリギリ）　そこのとっても可愛らしいお嬢さんはちょっと待っててね～？あ、あと君のお家の電話番号も教えてくれる？」

「かっ可愛い／／／・・・・わ・・・・わかった・・・・」

「じゃぁ、ちょっと待っててね～♪・・・・・オラァ！早く来い性犯罪者！！」

「ち、違うんだ！これはちょっと魔が・・・・って性犯罪者！？僕はただ身代金を・・・・」

「・・・・今ならまだ未遂で済むから・・・・・警察nっと、公衆電話発見！！とりあえず、保護者の方に連絡を・・・「きゃーー！雪で滑ってーー！！そこをどいてくださーーい！」はい？」

目の前には迫り来る自転車が・・・・ドコンッ！！

「「あ・・・お・・・・う・・・げふ。（バタ・・・・・）」」

こうして少年達の人生は、幕を閉じたのであったぁ（CV，●本でお送りしておりますぅ）

「あの・・・・ごめんなさい・・・・・だ、大丈夫ですか？」

「「てて・・・・・・・・・」」

・・・・・生存能力は黒いＧ並みの少年達なのであったぁ（ＣＶ，若●でお送りしていますってばぁ）

第四話　運命は英語で言うとデスティニー（前書き）

お気に入りが9件になりました！！

ありがとうゴザイマス！！

第四話　運命は英語で言うとデスティニー

ａｒａｓｉＳＩＤＥ

「「あ・・・お・・・・・う・・・げふ。（バタ・・・・・）」」

「あの・・・・ごめんなさい・・・・・・だ、大丈夫ですか？」

「「てて・・・・・・・・・・」」

ハヤテを抱えて避けることくらいはできたけど・・・・・・・・あのタイミングで来られると避けるわけにはいかないじゃないですか、避けたらこの女性が怪我をしてしまうかもしれませんでしたし

「あの・・・・お医者さん呼びましょうか？」

「・・・・・・」

綺麗な人ですね～～今まで見た女性の中でも１，２を争うような・・

・・・って完全にハヤテは見とれちゃってますね？

「あの・・・・体は？」

「体がどうかしましたか？（スクッ）」

「（・・・・・・）えっと・・・・・」

「ご心配なく。頑丈だけが取り得ですから。」

「（・・・・・・・・・・）では、そちらの方は・・・・」

「ああ、ぜんぜん大丈夫ですよ？コレでも兄よりは丈夫ですから。」

「あら、ご兄弟だったんですか？それは気づきませんでした。」

「（お・・・・驚いたよパトラッシュ・・・・世の中にはこんなキレーな人がいるんだよ・・・・・お前は犬だからわかんないだろーけど。）」

「（ハヤテは今絶対変なこと考えてんだろーな・・・）一応双子な

んですよ？二卵性なので似てませんけど・・・・」

「そうなんですか・・・・えっと・・そのお兄さんは本当に大丈夫ですか？ボーとしてらっしゃいますけど？」

「へっ！？はい、もちろん！！頭はいつもゆるんでますから！！」

「あの・・・ご無事でしたらちょっとお聞きしたいことがあるのですが・・・・よろしいですか？」

「え？なんでしょうか・・・・？」

~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

『あなた、恋人とかいますか？』

『！！』

『自転車であなたを轢いた瞬間思ったんです・・・・これは運命。英語で言うとデスティニー。ですから私、あなたのことが・・・・』

『ドキドキドキドキ』
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「（なんて嬉しい展開に・・・・・・せっかくのクリスマスだし・・・やっぱ・・・・）」

「ジトーーー（ハヤテの奴・・・絶対へんなこと考えてんだろうな・・・ハァ・・・・）」

「（うーーん・・・・・・本当に大丈夫かしら・・・・・・）」

「・・・で、その子の特徴は？性別とか、来ている服の色とか、年齢とか・・・・」

「女の子を探しているんです。１３歳になるちっちゃい女の子なんですけど・・・」

「もしかして・・・・パーティードレスとか着てませんでした？髪型はツインテールで・・・・」

「そうなんです！！あのこ世間知らずだから・・・・誘拐犯にだまされてヒョイヒョイついて行かないか心配で・・・・って心当たりがあるのですか？」

「はい、ちょうど今ご自宅に電話w「そいっ！！！」ゴフゥ！！ハ、ハヤテ・・・・貴様・・・ガクッ」

「（借金を返すためにもここで失敗するわけにはいかないんだ！！）悪いですけど・・・・知りませんよ・・・・（誘拐する）予定がありますから僕たちはこのへんで・・・・」

「そ、そうですか（弟さんがいきなり倒れかけたけど・・・大丈夫かしら？）・・・もう少し探してみます・・・・あ！！あの・・・ちょっと待って。」

「はい？（フワッ）・・・え？」

「こんな寒い夜にそんな薄着でいると・・・・風邪を引いちゃいますよ・・・・・？」

「・・・・・（じわっ）えぐっ・・・・・」

「え？」

「うあああああ・・・・・・・・・（ポロポロポロ）」

「ええ?･え?･え!?･あの・・・・・・私何か悪いことでも・・・・・!?･」

「ごふっごふっ!!・・・・ハヤテ!お前いきなり殴りやがっt・・・何この状況??」

「あの!!その女の子ですけど・・・実は!!」

『誰かーーーーーーーー!!!』

第五話　時速８０キロ（前書き）

日刊ランキング乗れば・・・・・

お気に入りも増えるはず！！

と言うことで頑張ります！！！

あと、一話あたりの長さを長くしたほうがいいのかな？

第五話　時速８０キロ

「こんな寒い夜にそんな薄着でいると・・・・風邪を引いちゃいますよ・・・・・・？」

「・・・・・（じわっ）えぐっ・・・・・・」

「え？」

「うあああああ・・・・・・・・・（ポロポロポロ）」

「ええ？え？え！？あの・・・・・・私何か悪いことでも・・・・・！？」

「ごふっごふっ！！・・・・ハヤテ！お前いきなり殴りやがっｔ・・・何この状況？？」

「あの！！その女の子ですけど・・・実は！！」

『誰かーーーーーーーー！！！』

『ぐっ！！何をする！！離せ！！』

『うるせぇ！！ちっ！！大人しくしろ！！』

『くっ！！離せ！！離せ～～～～！！』

バタン

ブロロロロ・・・・・・

「・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「目の前で誘拐されてったよあの子・・・・・・」

「大変！！あの子ったら！！本当に誘拐されてる！！どうしましょうどうしましょう！？と・・とりあえず警察を・・・・！！」

「・・・・自転車・・・・ちょっとお借りしますよ。あと警察に連絡を・・・・・」

「え？ちょ・・・・君！？」

「ご心配なく。僕が必ず追いついて、あの子を助けてみせます。」

「で・・・・でも、相手は車よ！！！そんな自転車なんかじゃ・・・・絶対に追いつけるわけが――――――――――（ゴッ）ない。・・・・・・え？」

「ハヤテの奴いつもの二倍くらい飛ばしてるな～～？じゃぁ、警察はお願いします！！」

「へ？君は？（ギュオッ！！）・・・・人間辞めてませんか？」

この二次創作の主人公は決して人間辞めてるわけではありません～、

一度死んじゃってますけどぉ（ＣＶ，ｗａｋａ●ｏｔｏですってばぁ）

第五話　時速８０キロ（後書き）

日刊ランキングに乗ってもお気に入りが増えなかったら・・・・・

ガクブルガクブル・・・

第六話　そのニット帽はハゲを隠すため・・・

「まったくこうもあっさり誘拐できるとはな！！」

「一人になってくれて助かったぜ！！」

「・・・・・・（怒）」

「ところでアニキ、先程から人質が恐ろしい殺意を持った目で睨んできているのだが・・・・」

「気にするな！！」

「おい、そこの馬鹿二人・・・・お前達に少し頼みたいことがあるのだが・・・・」

「ふはははは！！何だ小娘！？一得が泣き叫んだって無駄だぜ！！」

「こっちは借金で生きるか死ぬかの瀬戸際なんだ！！ちょっと大人しくしていてもらおうか！！」

「空気が汚れるから、呼吸をやめてくれないか？環境破壊だぞ。大切にしろよ、地球は。」

「「・・・・・・・・・・」」

「こ・・・・このガキ！！」

「まあ、待て！！人質殺したら元も子もねえ！！まだそいつの身元わかってねーんだから。それとてめぇも・・・・あんまりナメた口は利くなよ！！こちとら博打で作った借金のせいで、危ねーチワワに臓器狙われてる身だ・・・・だからオレ達を怒らせると・・・・・少々痛い目見る事になるぜ。」

「だから・・・・・・呼吸するなと言ったろ？ハゲ！！」

「！！！」

「こ・・・・この・・・・・」

「つーかお前も、その馬鹿丸出しのグラサンはどこのファッションリーダー気取りだ？それともあれか？宗教か？馬鹿の神様を光臨させる儀式の途中なのか？」

「てめぇ、アニキのハゲは馬鹿にしても、グラサンだけは許せねぇーーーーーー！！」

「ばっ！！誰もハゲてねぇーよ！！」

「こうなりゃ大人を馬鹿にするとどうなるか、身体に教えてやるぜ！！」

「え！？弟よ！！いつからそんな子供好きに・・・・・」

ドカァ！ミシィ！！

「ち・・・近寄るな変態・・・それ以上近づいたら・・・・人を呼ぶぞ馬鹿者！！」

「はっ！！馬鹿はお前だ！！小娘！！時速８０キロ以上でぶっとばす車に、呼べば来る奴がいるとでも思うのか！？」

「いるさ！！命がけで私をさらうと誓った。だから呼べば来るさ！！」

「だったら今すぐ呼んでみやがれ！！」

――――――――――――――ハヤテ！！

ゴウッ！！！

「！！なにぃ！！」

ズガガガガガ！！

ギッ！！

「おい、この悪党ども！！おとなしくその子をかえ――――――――

「おい！！ハヤテ危な――――――

ドガァ！！！！！！

第七話　やり残したこと

「いるさ！！命がけで私をさらうと誓った。だから呼べば来るさ！！」

「だったら今すぐ呼んでみやがれ！！」

――――――――――――――――ハヤテ！！

ゴウッ！！！

「！！なにぃ！！」

ズガガガガガ！！

ギッ！！

「おい、この悪党ども！！おとなしくその子をかえ――――――――

「おい！！ハヤテ危な――――――

ドガァ！！！！！！！

「あっ！！アニキ！！アイツら轢いちまいましたよ！！もしかして・・・殺しちまったんじゃ・・・」

「っせえ！！いきなり目の前に出てくる奴が悪いんだよ！！」

「おい・・・・お前達！！よくも・・・・・・よくも二人を！！」

ａｒａｓｉＳＩＤＥ

「おい、この悪党ども！！おとなしくその子をかえ――――――――

「おい！！ハヤテ危な――――――

ドガァ！！！！！！！

ハヤテに少し遅れて誘拐犯の車に追いついたのはいいけど・・・・・
見事に轢かれたなぁ・・・ハヤテが勝手に飛び込むから・・・

地面に落ちるまえにキャッチするのはいいけど・・・・血でベッタリになるな・・・・仕方ないか・・・・ってんん??

クルクルクル・・・・ゴッ!!バンッ!!（ハヤテが回転しながら車のボンネットに飛び乗った音）

「あ〜〜〜〜悪いんだけど・・・・その子を僕に・・・・返してくれる?」

「「は・・・はい・・・・・」」

・・・心配なかったか・・・・血の残量以外は・・・

ウ～～～ファンファンファンファン

警察も来たし、誘拐犯は任せてハヤテの手当てを・・・・・

「おい、馬鹿アニキ。さっさと傷見せろ。止血すっから」

「ああ、ごめんねアラシ・・・・」

「おい！！お前その傷――――――」

「あ・・・・よかった無事だった？」

「ん・・・・うん・・・・私はね・・・・」

「君が無事で・・・本当に良かった・・・・・・」

「またお礼しなきゃな。／／／」

「だったら・・・今度は僕らの・・・新しい仕事でも・・・・・見つけて――――――「おっとっ（ドスッ）グフゥ！！ハヤテ・・・・・お前・・・オレに恨みでも・・・・ガクッ」

「え!?お・・・・おい!!」

「ナギ!!」

「おお!!マリア!!そいつらの応急手当を頼む!!私のケータイを!!」

「へ?え、え～と・・・」

薄れていく意識の中でさっきのお姉さんの声を聞いた気がした・・・

・

第七話　やり残したこと（後書き）

「（ピッ）クラウス、私だ。位置はわかるな？大至急医療班を手配してくれ。１分以内だ。」

「あの・・・とりあえず見た目ほどひどいケガではなさそうですよ。弟さんの方は傷一つありませんし・・・・」

「な、なにぃ！！」

この作品の主人公は某公式チートさんと同等の頑丈さで御座いますぅ（ＣＶ，ＮＷ）

第八話　お風呂にはロマンが詰まっている

「この男たちを・・・・・私の新しい執事にする。」

「・・・・・・・・・えっと、話の流れがよく理解できないのですが・・・・」

「ま・・・・命の恩人の頼みというのもあるが・・・・・なんと言うか、その・・・・・そっちの男に告白されたんだ。さっき公園で・・・・とても情熱的に・・・・・『君をさらいたい』とかなんとか・・・・こっちの男も・・・・私のことを・・・・とっ・・・とっても可愛らしい・・・・お嬢さんって・・・・（カアアア／／／／）」

「はぁ！？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ご兄弟のお兄さんの方はまあ確かに、頭を相当激しく打ったようですが・・・命に別状はありませんよ、命には・・・おそらく日ごろからかなりしっかり鍛えていたのでしょう。驚異的な頑丈さですよ・・・・頭は元から悪そうですし、顔も貧相ですが・・・・・弟さんの方は・・・・本当に時速８０キロの車に轢かれたのか？ってくらいなんともありません。お兄さんよりもさらに鍛えていたのでしょうね。・・・・彼はもう私達と同じ人間なのか怪しいくらいですよ。気を失った原因はただの睡眠不足でしょう。最近しっかり寝ていなかったんじゃないですかね？まあ、何かあれば呼んでください。」

「はい先生、ありがとうございました。」

「で？どういういきさつがあったんですか？」

「何が？」

「何がって・・・・あのご兄弟とのいきさつですよ。お兄さんは自転車で車に追いついたり、その車に轢かれても命に別状はなかった

り・・・弟さんは走って車に追いついてお兄さん同様轢かれて無傷だったり・・・・もはや人にカテゴリされるのかわからないと思うんですけど。」

「そりゃあ私の執事になる兄弟だ。きっと体は新造細胞とかでできているに違いない！！」

「いいんですか、人間じゃなくて？」

～～～～ナギがマリアに事情説明中～～～～

「ま・・概ねナギの方の事情は理解しました。あの方達が起きたら知らせますから自室にいて下さい。」

「うむ、わかった。とにかくあいつらを私の執事にするから。」

バタンッ

「（さてさて・・・・・どうしたものでしょうか・・・・・）」

ａｒａｓｉＳＩＤＥ

「う、う～～ん・・・・ここはどこだ？」

目の前にはものッすごく豪華な調度品の数々が・・・・

「ここは・・・・もしかして天国・・・・な訳ないな。もう一度死んだら確実にあのクソサンタの元に行くはずだし、もとより怪我なんかしてないしな。・・・・・と言うことはあのパーティードレスのお嬢さんの家と言うのが最有力か・・・・とりあえずハヤテが何か起こす前に見つけ出さないと、お風呂で何か起こしそうな気がするし・・・・・・・」

この小説の主人公はよ～～～～く！！兄のことを理解しておりますぅ（ＣＶ，Ｗ）

ガチャ

「とりあえず誰か人を見つけてハヤテの事を聞かないと。・・・・・・・こっちのほうから人の気配がする。」

廊下に出て人の気配がするほうへ向かって行く。

それにしても・・・・この家・・・・いや、屋敷はとても広い割りに人の気配が少ないな？

一番近い人の元に着くまでに一分は掛かりそうだ。

「（あっ人がいる！）あの～～？」

「ムゥ？誰かな？この三千院の屋敷を無断でウロつく変質者は・・・・」

「へ？」

このおじさんいきなり何を言ってるんだ？

「成敗してくれる！！喰らうが良い！！クラウスキーーーーック！！」

「はいぃ！？『気合防御』！！」

ガキィン！！

「その身のこなし・・・只者ではない・・・お前は何者だ？」

～～～～～状況説明中～～～～～～

「先程お嬢様が運ばれてきた方でしたか。こ、これは失礼しました。このたびはお嬢様を助けていただいてありがとうございます。あと、お兄様のお部屋は申し訳ありませんが私は存じ上げておりません」

「そうですか・・・・・わかりました、とりあえず部屋に戻っておきます。これ以上動き回ってすれ違いになってしまったら大変ですし」

「申し訳ありません。早急に対処しますので・・」

「いえいえ良いんです。兄は少しに抜けているところがあるので心配だっただけですから。」

「いえ、お嬢様からは客人として迎えるように申し付かっておりま

す。確認してきますのでこの部屋でお待ちになっていて下さい、すぐに使いのものを出しますので。」

「そうですか・・・ならお願いします。」

ガチャ

バタン

「綾崎アラシ・・・・あの身のこなし・・・・・姫神の公認に最適かも知れんな？考えておこう。」

こうしてアラシはこの屋敷の執事長クラウスに認められたのであった。

～～～～その頃ハヤテは～～～～

「・・・・・それにしても、本当に頑丈なんですね・・・・体・・・」

「へ？」

「だって・・・・あんなに激しく車にひかれたのに・・・命に別状はないといえ、深い傷を負っているのにお風呂に入るなんて・・・・」

「・・・・・・・・」

「普通だったら、傷口が開いちゃいますよ～～」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「ゴファッ！！！」

「キャアアアア！！！」

大浴場で今度こそ本当に死に掛けていたらしい

第八話　お風呂にはロマンが詰まっている（後書き）

なぜ、ナギが誘拐されたときにハヤテしか呼ばなかったのかと言いますと、ただ単に名前を知らなかっただけなんです。

請求書の裏にはハヤテの名前しかなかったのです。

アラシはもともと

「クリスマスプレゼントなんて要らない！！（サンタが嫌いなため）」

と言っていたのでこうなりました。

第九話　自白→自爆

ｈａｙａｔｅＳＩＤＥ

ああ・・・今度こそ本当に死んだな・・・・あんな深い傷を負ってたのに今の状況を夢と勘違いしてお風呂に入っちゃうなんて・・・・・

いや・・・もしかしてこれは死ぬ前に神様が見せてくれた夢なのかな？

アラシには悪いけど・・・・・目を開けば今度こそ・・・・ネロとパトラッシュがいる天国で・・・・

「さっさと起きろ、このバカ兄貴！！（ドスッ！！）」

「ガフゥ！！ア、アラシ・・・・僕は死んだはずじゃ・・・？」

「お目覚めですか？綾先ハヤテ君？」

「あ・・・・あなたは・・・・さっきお風呂場で・・・」

「ずっと!!お屋敷に運ばれてからずっと寝てましたが大丈夫ですか?」

「「「・・・・・・・・」」」

「僕・・・・ずっと寝てましたか?」

「もちろん!!ずっと寝てましたよ!!」

「(ジィ〜〜〜〜)」

「そうか・・・じゃあやっぱり・・・・あれは夢だったんだ。ん?あれ・・・・・?それにしてもなんでこんなにフトンが濡れて・・・・?」

「!!ね・・・・寝汗ですよ寝汗!!ハヤテ君、すごくうなされていましたから。」

「(ジト〜〜〜〜〜)」

「・・・・さっきからどうしてアラシはそんな目で僕を見てるの？」

「いや～～べっつに～～～？予感が当たったんだな～～って思ってただけだから気にしないで？（ジッ・・・ト～～～～）」

「ま、まあいいけど・・・・・あ、でもさっきからどうしてメイドさんは僕の名を？・・・・ていうか、ここどこですか？」

「え～～～と・・・・」

～～～～～説明中～～～～～

「ハヤテ君の名前はこちらから・・・・悪いとは思いましたが・・・・中を拝見させていただきました。」

「あ・・・」

「しかし大変な状況のようですね。」

「いやあ、たいしたことないですよ・・・・アラシもいることです

し。」

「それは頼もしいですね。ところでハヤテ君、お嬢様が来る前に少しお話したいことがあるのですが・・・・その・・・先程のお嬢様との公園での一件について・・・・」

「（ピキッ」）

「（これはフォローが必要になりそうだな・・・）」

「さらうとかどうとか言ったという・・・」

「スミマセン！！スミマセン！！誘拐なんて二度と――――――――！！」

「・・・・え？・・・誘拐？」

「――――！！（はっ！）」

自白――――――――

隠していたことを自分から打ち明けること。

自爆――――――
今のコイツのような状況。

「ええっと・・・少しお話聞かせてもらえますか？」

「は・・・はい・・・・・」

その後被告の弁明は３０分以上続いたという・・・・

「はぁ～～～、この馬鹿は・・・・・全く・・・・・」

第九話　自白→自爆（後書き）

感想、評価お願いします！！

第十話　カラ回る想い（前書き）

作者帰宅後・・・・・

「ふ～んふ～んふ～～ん（ポチッウィ～～ン）・・・感想の確認しないと・・・・ん？・・・んん！？ひょ・・・・評価がすごいことになっとる！！」

日刊ランキング６６位に載ってました・・・

ありがとうございます！！！！

第十話　カラ回る想い

ａｒａｓｉＳＩＤＥ

「・・・・・なるほど。ハヤテ君達の方の事情は理解しました。」

「その・・・お嬢さまのことを知らないとか、嘘をついた事も謝りますから・・・・どうか・・・・この件についてはどうか見逃してほしいというか・・・・・・」

「本当は僕がご自宅に電話する直前だったんです。迷子だって言うことはすぐにわかりましたから・・・・兄も魔が差してしまっただけなんです。どうか、見逃してもらえませんか・・・？」

「いやまぁ確かに・・・・人は仕方なく嘘をつくというのもありますし・・・・・」

まったく・・・・ハヤテが最初から誘拐なんて考えなきゃこんな事にならなかったのに・・・・

でもどうにか見逃してもらえそうで助かった・・・・

「と言うか実は・・・・・ハヤテ君の『さらう』とかどうとかというセリフとアラシ君の『可愛らしいお嬢さん』というセリフを・・・・あの子がですね～――――――」

「おおなんだ、もう起きていたのか。」

「あ・・・・・・」

「どうだ？体の具合は？」

「うん・・・・もう平気・・・・ありがとう。」

「ハヤテはともかく僕はただの寝不足みたいだったからもう大丈夫だよ。」

「でも・・・・・さっきはゴメン。公園で・・・あんなこと（誘拐未遂）・・・・」

「僕も・・・もっと（兄を）抑えられたら良かったんだけど・・・」

「ん・・・いやその・・・・・（生まれて初めての愛の告白・・・

しかも二人同時から・・・）驚いたけど・・・・・嫌ではなかったし・・・・ただ私達は互いの事をよく知らないから・・・・・やっぱりすぐにってのはよくないというか・・・・どちらかを選べって言われても選べないっていうか・・・・・」

「・・・・・・・（あれ～～？この子達見事に誤解しまくってませんか～～？これは・・・・どうしましょう・・・・）」

「うん・・・・そうだね・・・（誘拐未遂の罪悪感）」

「たしかにそのとおりだと思う・・・（兄を未遂とはいえ止められなかった罪悪感）」

「で・・・・私もあれから考えたのだが・・・・お前達、仕事探していただろう？」

「え？う、うん・・・・・」

「だったらこの家で・・・・・私の執事をやらないか！？」

「「・・・・・・・執事？」」

「あの、お嬢さま・・・そういうのはよく事情を聞いてからの方が・・・」

「けど、姫神の後任は必要だぞ。姫神の後任がいないから誘拐とかされるわけだし・・・・・！！」

「「執事・・・・」」

こんな僕達に・・・・住み込みの仕事をくれるなんて・・・・なんて優しいんだ・・・

「でもハヤテ君とアラシ君は・・・執事ってどんな仕事かもわからな――――――」

「「やります！！」」

「お任せ下さいお嬢さま！！何があろうと僕らが命をかけて・・・・あなたをお守りいたします！！」

「そのとおりです！！たとえテロリストに狙われてもお嬢さまを無傷で守り通して見せます！！」

「ば・・・・ばか・・・・・・マリアの前で照れるような事を言うな・・・・」

「（ど・・どうしましょ・・・どうしましょ・・・この天然さん達は・・・）」

こうしてただ一人事情を理解しているメイドさん以外は、全くもって不毛な方向にカラ回るのであったぁ・・・・・・

第十一話　「・・・マリア・・・それは人間ではない・・・・どこかのＤｒ．

決して主人公はロボットなんかじゃありませんよ！！

第十一話　「・・・マリア・・・それは人間ではない・・・・どこかのＤｒ．ス

「新しい執事？」

「ええ、お嬢さまがお雇いになると・・・どうします？クラウスさん。」

「うむぅ・・・・執事長としては姫神の後任が欲しいところであるし、あのアラシという男の身のこなしは只者では・・・どんな兄弟なのだ？その綾崎兄弟は・・・・」

「ええと・・・・そうですねぇ～～お兄さんのハヤテ君は時速８０キロで暴走する車に自転車で追いついて、そのままゴミのように轢かれても平気だったりする子ですわ？」

「・・・・マリアよ・・・・・それはどこのガンダムだ？」

「いえ・・・一応人間ですけど・・・・・弟さんのアラシ君は時速８０キロで暴走する車に走って追いついて、そのままゴミのように轢かれても傷一つ付かない子です♪」

「・・・マリア・・・それは人間ではない・・・・どこかのＤｒ．スランプが造った人間型アンドロイドだ・・・」

「一応人間のはずですよ・・・・・アンドロイドの件は否定できませんが・・・」

「無理だ！ガンダムとア●レちゃんに三千院家の執事は務まらん！！帰ってもらいなさい！！・・・・と言いたいところであるがお嬢さまの意向でもある・・・・今回だけは後日試験を行うこととしよう。お嬢さまにお伝えしておきなさい。とにかくわしは明後日まで戻らんので・・・その間、問題のない様にお願いしますよ！！」

バタンッ

「ふ～～～～っ、一応どうにかなりそうですけど・・・・試験ですかぁ・・・・・」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ａｒａｓｉＳＩＤＥ

「え？この屋敷って3人しか住んでいないの？」

「ああ。この家は別宅の中でも特に小さいからな。たいして使用人は要らないんだ。」

「・・・アラシ・・・これがブルジョワってヤツなのかな・・・？」

「・・・僕に聞いても分かる訳ないだろ？で、お嬢さま、何故わざわざその小さい別宅に住んでいるのですか？」

まったく・・・ビンボー人の僕達がそんなことを知ってる訳ないじゃないか。

「うむ、私は小さくて狭い家の方が落ち着くからな。」

「「そうか（ですか）」」

この僕達にとってのお屋敷がお嬢さまにとっては小さくて狭い家・・・・

これが価値観の差というヤツなんだなぁ・・・・

「でもそんなに人が少ないと余計に緊張しちゃうな。」

「??何を言っているのだ?」

「だって、住み込みって事は僕もこの屋敷に居候するわけでしょ?」

「それはそうなるな。」

「だからその・・・いくら広いとはいえ可愛い女の子と・・・・一つ屋根の下っていう状況は・・・・やっぱ緊張しちゃうっていうか・・・その・・・・」

「たしかにハヤテの言うとおりだな・・・」

可愛い女性と可愛い女の子の2人がこのお屋敷には住んでいるからなぁ・・・

ああ、あと髭の人もいたっけ?

「バカ!!そんなふうな言い方をするな。こっちまでテレるじゃないか!!////・・・大体一つ屋根の下と言っても・・一緒の部屋で寝泊りするわけじゃないし・・・人の出入りもそこそこあるから・・・そもそも2対1ってゆうのは・・」

「でもやっぱり緊張しちゃうよ。マリアさんみたいなキレーな人と一緒だと・・・・・・」

「「・・・・・・・」」

「フッ！（ドカッ！！）」

「ゴフゥ！？・・・ア、アラシ・・・いきなりどうし・・て？・・・・ガクッ」

「お嬢さま、愚兄が変なことを口走りましたので処理しました。『可愛い女の子』の中にお嬢さまを含めないとは・・・・」

「・・・・よくやった。私が４８の殺人技と５２のサブミッションを連続でかける手間が省けた・・・・私はもう寝る！！ハヤテにはよ～～くっ！言っておくようになっ！！」

「仰せのままに」

ギィィィバタンッ！！

「あの・・・・どうなさったんですか？」

「いえ、気にしないでください。兄の悪い癖が出ただけですから・・・・はぁ・・・・」

近いうちに兄の女心のわからなさを矯正したいと思った弟君なのであったぁ

第十一話　「・・・マリア・・・それは人間ではない・・・・どこかのＤｒ．ス

聞いて下せえ・・・・
十話をアップしてから仮眠を取ったり夕飯食べたりしていたのです
よ・・・

その後この十一話を書いていたのですが・・・・
この数時間で日刊ランキングが２０位近く上がっていました。

『頑張ろう』と思いました・・・・・

第十二話　今日から執事！！（前書き）

最近作業用ＢＧＭに千本桜を使っております。

キーボードを叩く速度が上がるんです。やはりテンポのいい曲だからだと思うんですけど・・・

他に何かテンポのいい曲でオススメってありますかね？教えて下さると嬉しいです＾＾

第十二話　今日から執事！！

ａｒａｓｉＳＩＤＥ

翌朝・・・・・

「おお・・・これはこれは・・・アラシはどう？」

「執事服って言うのは初めて着たけど・・・・でもこうもサイズが合うものが都合よく・・・」

「サイズはどうですか？」

「はい！！ピッタリです！！」

「はい、ピッタリなんですけど、あの・・・もしかしてコレって・・・マリアさんがあの後仕立て直したなんてことありませんよね？」

「あら・・・アラシ君よく気がつきましたね？」

「え？これマリアさんが・・・・・？」

「昨日はもう晩かったのに・・・・ありがとうございます、マリアさん」

「いえいえ・・・それだけ感謝してくれれば十分ですよ。では・・・お仕事に参りましょうか。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「それで・・・仕事はどんな事をするんですか？」

「ハヤテ、今は年末だし掃除じゃないか？料理は最低でも試食してもらって許可がでてからだろうし・・・」

「ん～そうですね～～・・・・アラシ君の言うとおりで片っ端からお掃除ですかね～？」

掃除か・・・ならどうにかできそうだな・・・ここを追い出されたらハヤテの不幸体質ですぐさま借金取りに捕まりそうな気がするし・

・・・・・

ハヤテ＆アラシ　「「（がんばろう・・・・・・！！）」」

「あ？お嬢さまおはようございます。」

「ん？ああ、おはようマリア。」

「お嬢さま、お早う御座います。昨夜はよく眠れましたか？（ニコッ）」

「う・・うむ、おはようアラシ。き、昨日はしっかり眠れたぞ／／／／今日からしっかり頼むぞ？」

「見て下さいお嬢さま？この服・・・マリアさんが仕立て直してくれたんですよ？」

「・・・・（ジーーーー）」

「――――――って、あれ？」

「悪かったな！！どうせ私にはできないよ！！」

「（・・・・・？）」

「ま・・しっかり頼むぞ・・・あと私の書斎には近づくなよ。」

「・・・なんか僕のときだけ急に冷たくなった気がするんですけど・・・・」

「自業自得だよ・・・」

「どちらかと言うと・・・熱くなりすぎている気がしますけど・・・・」

「ま！！何にしても！！失った信頼は・・・仕事で取り戻して見せますよ！！」

「え？あの・・・・・」

「あ！！これ掃除道具ですね！！任せて下さい！！まずはあっちの

部屋からピカピカにして見せますから！！うおおおおがんばるぞ～～！！」

「「・・・・・」」

「・・・じゃぁ、僕はこっちの部屋からやっていきますね？お嬢さまのためにがんばってきます。」

「あ、はい。お願いしますね。」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第十二話　今日から執事！！（後書き）

今回は長さが微妙で区切りが悪かったのでここで切ります。

いつもより短いですが今日中にもう一話上げますのでご勘弁を・・・

第十三話　嫌な予感（前書き）

お気に入りが１００件を突破してヒャッハーーーな気分です！！

第十三話　嫌な予感

「あ！！これ掃除道具ですね！！任せて下さい！！まずはあっちの部屋からピカピカにして見せますから！！うおおお頑張るぞ～～！！」

「「・・・・・」」

「・・・じゃぁ、僕はこっちの部屋からやっていきますね？お嬢さまのために頑張ってきます。」

「あ、はい。お願いしますね。」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「（・・・・さっきのは良くなかった・・・・さっきのような事であの態度では、いくらなんでも心が狭すぎる・・・）」

「あら、こんな所に？この時間は書斎かと思っていましたけど？」

「ん？ああ・・・・調子が悪くてな・・・ハヤテとアラシは？」

「お掃除を手伝ってもらっています。やる気に満ち溢れていますわ。」

「書斎には近づかせないでくれよ。あと・・・私の事、何か言っていたか？」

「ハヤテ君はお嬢さまの信頼を得るために、アラシ君はお嬢さまの為に頑張るといってましたよ。まぁ、何か思うことがあるなら・・・直接お話になった方がよろしいかと思いますけど・・・・」

「そ・・・・そうだな！まずはお互い話をするのが大事だな！」

「はい？（特にあなた達はね・・・）」

「じゃぁちょっと2人のところに行ってくる！！」

「やんわり誤解を解いてくるんですよ～～～？」

ギィィィバタンッ

タッタッタッタッタッタ・・・・・・・・タッタッタッタッタッタッタッタ

ガチャ

「あの！！マリアさん！！一部屋、掃除が終わったので見に来てくれませんか！？――――――――って、どうかしましたか？」

「いえ・・・ハヤテ君とナギはとことん噛み合わないなぁ・・・・・と。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「でもまだ一時間も経ってませんけど・・・」

「はい！！とりあえず手順を確認してもらいたくて！！」

「手順って・・・え？なんだか・・・すごくキレイですね・・・」

「そうですか！？ありがとうございます！！」

～～～～～～ハヤテ手順説明中～～～～～～～

※知りたい方は後書き参照

「それにしても感心しました。ハヤテ君・・・お掃除とても上手なんですね。」

「え？そうですか？ありがとうございます！！高級品は特別な手順があるのかもって不安だったんですよ。」

「いえ、全部正解ですけど・・・・・よくご存知でしたね？そんなこと・・・」

「いやぁ～～9歳の頃から年齢偽って清掃のバイトで親の酒代稼いでましたから～／／／って言っても全部アラシが教えてくれたことなんですけどね？僕よりも掃除が上手なんですよ～～♪」

「（言葉の端々に笑えない話を自然に入れてきますね・・・どう返していいのかわかりませんよ・・・）・・・・・・ではその調子で次の部屋もお願いできますか？」

「はい！！喜んで！！」

ギィィィバタンッ

タッタッタッタッタッタ

「（クラウスさん・・・ハヤテ君たちなら簡単に試験を突破してしまいそうですよ・・・・ていうか、アラシ君は小さい頃からすごかったんですねぇ）・・・あ！？そういえば・・・書斎のこと言い忘れていましたけど・・・大丈夫かしら・・・？」

しかしぃ久しぶりに人に褒められた少年は調子に乗っていたぁ――――――

「よーーし！このまま屋敷中を掃除して・・・もっとマリアさんに褒めてもらおう！！そうすればお嬢さまの機嫌も良くなるに違いない！！そのためにはまず・・・・この迷路のような屋敷の構造を理解しなくては！！」

～～～屋敷のとある一室～～～

「（ゾクッ）・・・なにやらハヤテが変な事をしてお嬢さまを怒らせて屋敷から追い出される気がする・・・」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

後にアラシが『あの時止めに行っておけば・・・』と後悔すること
になるのは必然であったのだろぅ

「う゛〜〜ん・・・すっかり迷子だ・・・」

必然であったのでぇすぅ

（CV，「フグタく〜〜ん」がお送りしましたぁ）

第十三話　嫌な予感（後書き）

「あら？これは・・・」

「はい！！そちらの取っ手は銀製だったのでシルバーダスターを使って磨きました。」

「え？」

「こちらの銅像は真鍮（しんちゅう）ブラシで汚れを取った後、薄い中性洗剤で洗浄して・・・水気を取ってワックスで仕上げました。カーペットはウール製のキリムだったのでお湯を使わず、冷水に頭髪用洗剤と塩を少し加えて、色落ちしないように気をつけて軽く・・・ってあの僕マズイことでもしちゃいました？」

「いえ・・・素直に驚いているんですよ。」

第十四話　予感的中（前書き）

ただ今の時刻
３：３２
ひたすら眠いっス

第十四話　予感的中

ｈａｙａｔｅＳＩＤＥ

「う〜〜ん・・・すっかり迷子だ・・・」

屋敷の構造を把握しようとして走り出したのがちょうど１０分ぐらい前だったけど・・・迷子になるほど広いのにどこらへんが小さいんだろう？

「しかし本当に広いなあ・・・・・いったい幾つ部屋があるんだろう？そしてまた・・・・新しい部屋が・・・」

見つけた部屋に片っ端から入ってみてるけど・・・全く人の気配がしないよ・・・

「ここはまたハズレかな？」

《書斎》

ガチャリ・・・

「あ・・・でも・・・ここは結構・・・人の気配がする・・・ん？」

なんだこのノート・・・

お嬢さまの学習ノートかな？

「な・・・こ・・・これは！！」

【あっしのマジカルパワーで・・・・・！！決着をつけてやる！！！】

＜マジカル全滅ビーム！！！＞

［な・・・・っ！！なにぃ！！！］

カッ！！

≪くっくっく・・・・なかなかやるな・・・・だが私には効かぬわぁ！！≫

【ば・・・・ばかな！！！あっしのマジカル絶滅ビームが！！】

〈だめだよブリトニーちゃん！！アイツにはマジカルパワーが効かないんだ！！〉

「・・・・・・・・・・・絵日記？」

い・・・いかん！！こんなプライベートなものを見ては！！こんなこと・・・・こんなことお嬢さまに知られたら・・・・！！

「おい・・・・人の部屋で何を勝手に見ている・・・・」

「お、お嬢さま！？いえ！！こ・・・・これはその・・・・！！」

「あ！！それは私のまん・・・・」

「だ・・・・大丈夫です！！ほとんど読んでませんから・・・・お嬢さまのこの絵日記は！！」

ビキッ！！

「あ・・・・あれ？」

「え・・・・絵日記・・・・だと・・・・・・」

「はい！！・・・え？あれ？」

お嬢さまの後ろに『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ』って文字が見える気が・・・？

「こ・・・この・・・・・・バカァ！！！」

「お・・・お嬢さまぁ！？」

「うるさい！！お前なんかもう知るもんか！！人の気持ちも知らないで！！！ハヤテのバカ！！バカバカバ――――――――カ！！！もう出て行け――――――！！」

ガッシャーン（門の閉まる音）

「あんなに怒らせてしまっては・・・・もう合わせる顔が・・・」

あれは・・・よっぽど大事な絵日記だったんだなぁ・・・さよならアラシ・・・僕はまた違うところで住み込み仕事を探すよ・・・・仕事を見つけたらすぐに会いに来るから・・・・

トントントン

「ん？」

「やあハヤテ君。ようやく合えたな・・・」

「あ・・・どうも・・・・・」

≪借金取りが現れた！！≫

ごめんアラシ・・・もう会えないかも・・・

「オラァ！さっさと乗れ！！」

「おい、一人足りなくねぇか？」

「あぁん？・・・チッ、ならコイツから二倍臓器をとりゃいいだろ？」

「ヒィィィ！！！」

ブロロロロロロ・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・（スッ）いいんですか？」

「何がだ？」

「ハヤテ君本当に出て行ってしまいましてけど・・・・・・」

「は！？いやいや！！私は部屋から出て行けと言っただけで、屋敷から出て行けなんていったつもりは・・・・・！！」

「あ～～～～・・・・」

～～～～～～その頃～～～～～～～

キュッキュッキュッキュ・・・・・

「ふぅ・・・・これで二十部屋目も終わりっと・・・・（ヒィィィ！！！ブロロロロロロ・・・・・

（・・・・・んん！？」

第十四話　予感的中（後書き）

アラシの累計掃除時間

１時間３７分

掃除した部屋の数

２０部屋

第十五話　天邪鬼

「しかしまぁ・・・・世の中には酷い親もいたもんだ。自分達が博打で打った借金の返済に、自分の息子を売るなんて・・・こんな親、もう人として最低だな。」

「まったく・・・・・日本って国はどうなっちまうんですかね～」

「ほんとほんと♪売られる子供の身にもなれって話ですよね？」

「ま、それでも買うんだけどな。」

「ですよね～～～～～（´；ω；｀）」

こうして少年のつかの間の幸せ（累計１３時間ほど）は終わりを告げた・・・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「は～～・・・・外は寒そうですね～・・・・こんな寒空の下、帰る家もないのに追い出されたら・・・・さぞかし辛いでしょうね～～～～・・・」

ピキッ・・・

「わっ・・・私は部屋から出て行けと言っただけだ！！それなのに何を・・・・！！大体出て行けと言われたくらいで出て行く奴がいるか！！それに掃除とはいえ、人の部屋に勝手に入るなど・・・・怒鳴られたって文句は言えまい！！」

「まぁ、怒鳴った理由は部屋に入られた事よりも・・・せっかくの自信作を『絵日記』呼ばわりされた事にあるような気がしますけど・・・・」

ギクッ！

「そもそも大事な物をしまう癖をつけないからこんな事になるんですよ？」

グサッ！

「日頃から部屋の掃除は人任せ、着ていたものは脱ぎっぱなし、身の回りの物くらい自分で整理する癖をつけなさいって日頃からあれほど言っているのに・・・・」

ザクッ！

「それにあれはハヤテ君の失敗と言うより・・・ちゃんと注意しなかった私失敗ですし・・・いいんですか？このままで・・・・」

「・・・・・・（ツーーン）」

「まぁ・・・でもお嬢さまがそこまでおっしゃるのでしたら仕方ありません・・・・・・ハヤテ君の事はこのまま忘れましょう！！」

「えっ？」

「元々ハヤテ君はお嬢さまが独断で雇うと決めただけ人・・・そのお嬢さまが『もう用無し』と言うのなら、もはや引き止める理由もないですし・・・・」

「え？いや・・・！？それはその・・・・」

「それに執事はアラシ君一人でも十分だと思いますし・・・ハヤテ君の事を嫌いになったのならむしろこのままの方が・・・・」

「いや！！だからキライになんか――――――――――――」

「キライになんか？・・・なんかの後は何ですか？」

「・・・・・・／／／／／」

「なんかの後は何が続くのでしょうね～～～♪」

「ゴホンッ・・・ま、ハヤテは恩人だ。恩人を見捨てるようなマネ・・・三千院家の人間として・・・するわけにはいかん！！」

「・・・・・本当にこの子は・・・・天邪鬼なんですから・・・」

「・・・何か言ったか？」

「何か聞こえました？（ニコッ）・・・でも、どうやってハヤテ君を探すんですか？」

「なぁに、どうせハヤテなら・・・すぐに借金取りに捕まってるはずだ。ヤクザでも金貸しなら三千院家の情報網で見つからないはずがない。」

ピッ・・・トゥルルル・・・トゥルルル・・・ガチャ

［はい、こちらクラウスでございます。］

「クラウス、私だ。大至急、調査と手配してもらいたい物がある・・・・・」

「・・・かしこまりました。では、３０分程お待ち下さい。」

・・・ピッ

「ふぅ・・・さてと・・・・では、マリア・・・・後は任せた。」

「は！？・・・まさかと思いますけど・・・今更『ちょっと言い過ぎたかな？』とか思って、それで私に行けとか言っているのではないですよね・・・？」

「・・・・・・・・・・」

「お嬢さまがハヤテ君の主ですよね？」

「じょ・・・冗談だよ冗談！！自分で行くに決まっているだろ！？」

「ですよね～～～？・・・・・だそうですよ～～♪アラシ君？」

・・・・ガチャ

「お嬢さま・・・・勿論ご一緒させていただきます。」

第十六話　お馬鹿な執事と天邪鬼なお嬢さま

ｈａｙａｔｅＳＩＤＥ

ザザーーン・・・ザザーーン・・・

「オラ、着いたぞ。」

「さっさと降りろ！！」

「あの・・・もしもし？ここはいったい此処はどこなんでしょうか？」

「あ～～～ん？・・・病院」

ギィ～～～ガラガラガラ

「・・・・（港の倉庫の中にある病院って・・・）」

マズいぞ・・・これはいつ殺されても不思議じゃない・・・

どうにか早く逃げ出さないと・・・

「そう心配しなくても・・・別に殺そうって訳じゃねぇ・・・」

「え！？」

「取れる臓器とってお前をここから外国に売るだけだから・・・」

それは殺されるよりヒドイのでは！？

「あ～・・・僕、急に用事思い出しちゃった・・・と言うわけで帰ります！！」

ここは逃げるしかないっ！！

「あっ！！」

「待ちやがれこのガキ！！」

「あの野郎！！またあの足の速さで逃げる気だな！！」

「そうはさせるか！！」

「ああっ！！！」

「だいたいてめぇの親が悪いんだろ！！金がないなら身体で払うしかねーだろうが！！」

「大丈夫♪肺も肝臓も心臓も２つあるから？」

僕の心臓はひとつしかありませんよ！？

「うるさい！！金がねぇヤツはとっとと売られろ！！」

「嫌だーー！！そんなアバウトな臓器の数え方してる人に売られたくなーーい！！助けてアラシーーーーー！！」

ブンッ・・・ドカッ！！

「ゴホアッ！！」

「「助けてやろうか？」」

「だっ！！誰だお前は！？」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～

？？？ＳＩＤＥ

「だっ！！誰だお前は！？」

「お前達のような馬鹿共に・・・いちいち名乗る名前はない・・・」

「態々お出にならなくても僕が全部やりますのに・・・・」

「そ・・・その声はまさかお嬢さまとアラシ―――――――――！！」

そこには某武装で錬金なぁマンガのパピヨ●マスクをシンプルゥにしたタイプの白い仮面をつけたよ～～く見覚えのある少女とぉ、同

ぁじ形をした黒ぉい仮面をつけたこ〜〜れまた見覚えのある少年がいたぁ

「あ・・・あの・・・・何をやっているの・・？お嬢さまとアラシは・・・・？」

「わ・・私はお嬢さまなどではない！！」

「え？・・・は・・はぁ・・・？」

「私の名前は・・・え・・えーっと・・・『マスク・ザ・マネー』だ！！」

トントン

「お嬢さま、ここは強引に話を進めた方が・・・」

「今絶対お嬢さまって言った！！絶対言ったよね！？」

「さあ？何の事だか解りかねますね？」

「おう、てめぇら！！素人がヤクザなめてると・・・」

「頭の毛が薄い方は黙っていて下さいますか？今お嬢さまが大事なお話をされますので。」

「ほら今言ったよね！？ていうかアラシでしょ！？」

「はて・・・？何のことでしょう？お嬢さまがお話があるそうなので黙ってくれませんか？」

「ここまで堂々と『お嬢さま』って言ってるのに惚けるなんて・・・・」

「け・・・・毛が薄い方・・・・」

「だ、大丈夫ッス！！兄貴はハゲてないっす！！フサフサっす！！」

「では・・・どうぞお嬢さま・・・」

「もう僕は突っ込まないぞ・・・」

「あ、ありがとうアラｓ・・ゴホンッ・・・えーーー、私は・・・ナギと言う少女に頼まれて来た者だ！！」

「い、今アラシって言いかけ『お嬢さまのお話を遮らないでもらえますか？』・・・はい・・・」

「で！！・・・その少女からの伝言なのだが・・・・さ・・・・『さっきは怒鳴ってごめんなさい』・・・と・・その・・・伝えて欲しいと・・・あ！！あとお前が見たノートの中身は一応、彼女の自信作『世紀末伝説マジカルデストロイ』と言う漫画であって・・・けっして絵日記などではない！！！」

「あ・・はい・・・わかりましたスミマセン・・・マスク・ザ・マネーさん・・・」

「あ、私からも一言申させていただきますと・・・自分の仕える人のノートを勝手に読んでそのせいで追い出されて弟に心配をかける兄はサイテーだと思いませんか？そこの少年。」

「・・・ゴメンなさい・・・」

「誰に謝っているのですか？そういうことは本人に謝った方が良いと何故解らないのですか？あなたの頭はスカスカなのですか？」

「本当に・・・ゴメンなさい・・・」

「まあ、アラシ・・・・ゴホンッ・・もう彼もわかったみたいだからそこまでにして・・・・あと君もあの家で執事を続けるといい・・・その方が彼女もうれしい・・・と思う・・・」

「は・・・はい？」

こうしてお馬鹿な執事ぃと天邪鬼ぅなお嬢さまの喧嘩は終結したのおであったぁ

「そうはいかねぇに決まってんだろうが！！」

第十六話　お馬鹿な執事と天邪鬼なお嬢さま（後書き）

同日：『マスク・ザ・マネー』を入れ忘れていたので訂正

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1276ba/

アラシのごとく！

2012年1月8日21時53分発行